

分配方法の評価に対する Outcome bias の影響

齋藤美松^a 松元洋亮^b 亀田達也^c

要約

富の分配において、ある水準の結果を保証すること（結果平等）と、より良い結果を得る機会を保証すること（機会平等：※結果の確実性は保証しない）という考え方は、所得政策の是非を考えるうえで重要であろう。一方、ある意思決定によって実現した結果が既知になると、その意思決定に対する評価は後付け的に影響される(Outcome bias)ことが知られている。機会平等では様々な結果が生じうるので Outcome bias は所得政策の評価に影響しうる。本研究ではシナリオ実験で機会平等への評価に対する Outcome bias の影響と、その影響がイデオロギーの差（結果平等派か機会平等派）で異なるか検証した。その結果、機会平等により所得格差が発生したシナリオで、機会平等は結果平等より特に低く評価され、結果平等派と機会平等派の評価差も最大となった。これらの結果は、所得政策の評価について所得格差の発生がもつ影響を示唆した。

JEL 分類番号： D3, H4, I3

キーワード： 分配, Outcome bias, 結果平等, 機会平等

^a 東京大学大学院人文社会系研究科・日本学術振興会特別研究員
middle158725071@gmail.com

^b 東京大学文学部 mattuu1231@gmail.com

^c 東京大学大学院人文社会系研究科 tkameda@let.hokudai.ac.jp

1. イントロダクション

1.1. 所得政策

どのような資源分配の方法（所得政策）が採用されるべきか、という問題は、経済学や政治哲学のみならず、一般の人々の間でも重要な政治課題として議論されてきた（ex. 「ウォールストリートを占拠せよ」運動）。特に、人々にある程度の所得水準を平等に保障する「結果平等」という考え方と、より良い所得水準を得る機会を平等に保障する（ただし、所得水準の平等は保証しない）「機会平等」という2つの考え方は、富の分配に関する所得政策の是非を考える上で重要であろう。

1.2. Outcome bias と所得政策

心理学では、ある意思決定に対する評価は、その意思決定によって実際に生じた結果の情報によって影響を受けること（Outcome bias）が指摘されている（Baron & Hershey, 1988）。つまり、意思決定者の立場では、実現する結果がどのようなものになるかが確率的にしか分からない状態で意思決定を行わざるを得ないが、意思決定を評価する立場にある者は、実現した結果を知った状態で、いわば後付け的にその意思決定に対する評価を下してしまうということである。この現象は、所得政策の評価について重要な意味を持ちうる。なぜなら、「機会平等」を実現する所得政策（以下、機会平等政策と呼ぶ）は、「結果平等」を実現する所得政策（以下、結果平等政策と呼ぶ）と違い、その帰結として様々な所得水準が人々の間に実現されうる。そのため、機会平等政策が実際にもたらした所得水準が、機会平等政策がとられたことに対する評価に影響を与えるかもしれない。そこで、本研究では、他者の下した資源分配に関する意思決定の評価に Outcome bias が与える影響を、シナリオを用いた実験から検証する。さらに、もともと結果平等政策と機会平等政策のどちらを支持しているのか、といったイデオロギーの個人差によって、Outcome bias の影響が異なるのかも合わせて検証する。

2. 方法

2.1. 参加者

実験は、東京大学の学生 121 名（男性 78 名；Mean age \pm S.D. = 21.98 \pm 2.09）及び、北海道大学の学生 130 名（男性 79 名；Mean age \pm S.D. = 19.69 \pm 1.2）に対して、質問解答用ソフトウェア Qualtrics を用いて行われた。

2.2. シナリオ

実験で参加者は、以下のシナリオを読んだ上でいくつかの質問に回答した。参加者が実際に読んだシナリオは以下の通りである。

シナリオ

A 君は、面識のない B 君、C 君、それぞれにお金を分配する立場にあります。A 君が選択できる分配のルールは以下の二種類です。（※A 君自身がお金を出すわけではありません。）

ルール①：B 君に 50 万円、C 君に 50 万円をそれぞれ与える

ルール②：B 君、C 君にクジを引く権利をそれぞれ与える

このクジは 50%の確率で 180 万円が与えられ、50%の確率で 20 万円が与えられる。B 君と C 君はそれぞれ独立にクジを引くため、B 君、C 君がともに 180 万円を得ることもあれば、2 人とも 20 万円となることも、どちらか 1 人だけが 180 万円を得ることもある。

各参加者は、この状況設定の下、A 君が、

ルール①（結果平等的分配）を選んだケース及び、

ルール②（機会平等的分配）を選んだケース、

という 2 つのケースについて、A 君がそのルールを選んだことについてどのように思うかを【とても悪い～とても良い】の 6 点尺度で評価した。なお、ルール②が選ばれたケースでは、クジによって実際に生じた結果として、表 1 の 4 条件（参加者間条件）が設けられており、参加者はクジの結果についていずれかの情報を得た上でルール②を評価した。

表 1 クジの Outcome についての条件（参加者間）

Outcome 条件	ルール②が選ばれたケースの結果 (B 君が得た金額, C 君が得た金額)
平等良	180 万円, 180 万円
平等悪	20 万円, 20 万円
不平等	180 万円, 20 万円
未知	クジの結果の情報を与えない

また、イデオロギーの個人差と Outcome bias の影響との関係を検証するにあたり、参加者を結果平等政策派と機会平等政策派に分類するため、以下の個人差検出シナリオについての回答も求めた。

個人差検出シナリオ

あなたは以下のような実験に参加したとします。

この実験では、誰か1名の参加者が、自分以外の参加者の実験報酬を決めなければいけません。

選択できる報酬の分け方は以下の二つです。

分け方①：参加者全員に800円の報酬を与える。

分け方②：参加者それぞれにクジ引きをする機会を与える。

このクジは50%の確率で2000円を得、50%の確率で200円を得るようになっている。分け方②が選ばれると、参加者はそれぞれクジ引きを行い、その結果にもとづいて、自身の実験報酬額が決まる。

各参加者は、この状況設定の下で、

- i) 参加者自身が報酬の分け方を選ぶ（分け手の立場）とき及び、
 - ii) 他の参加者に報酬の分け方を選んでもらう（受け手の立場）とき、
- という2つのケースについてどちらの分け方を選ぶ/選んでほしいかを【絶対に①～絶対に②】の4点尺度で回答した。

3. 結果

3.1. 全体傾向

図1にシナリオの各ケースについての参加者の評価を示した。横軸の左から、ルール②（機会平等的分配）が選ばれたケースの各 Outcome 条件が4つ示されており、最も右では、ルール①（結果平等的分配）が選ばれたケースが示されている¹。Outcome bias の影響を検証するため、機会平等的分配が選ばれたケースの各参加者の評価を従属変数に、Outcome 条件を独立変数とした分散分析を行ったところ、有意な主効果が見られた ($F(3, 247)=3.96, p=.009$)。具体的にどの条件間で差があるか多重比較を行ったところ、平等良条件と不平等条件間で有意な差が見られた ($t(121.98)=3.50, p=.0006, Bonferroni$

¹大学の効果を含む分散分析の結果、大学の主効果 ($F(1, 243)=0.80, p=.37$)及び、Outcome 条件×大学の交互作用効果 ($F(3, 243)=0.70, p=.55$)はともに見られなかったため、本研究では、両大学のデータを合わせた分析を報告する。

corrected).

また、ルール①（結果平等的分配）はルール②（機会平等的分配）に比べて高く評価される傾向が見られた ($t(250)=-1.68, p=.09$). 具体的には不平等条件に割り当てられた参加者において、結果平等的分配と機会平等的分配の間で評価に有意な差が見られた ($t(60)=3.42, p=.001, \text{Bonferroni corrected}$). 平等良条件における機会平等分配の評価と、結果平等分配の評価に差がなかった ($t(62)=-0.65, p=.52$) ことから、機会平等的分配によって良い結果が実現した場合（平等良）に高い評価がもたらされるというより、所得に格差（不平等）が生じたときに、特に低い評価がもたらされることが示唆された。

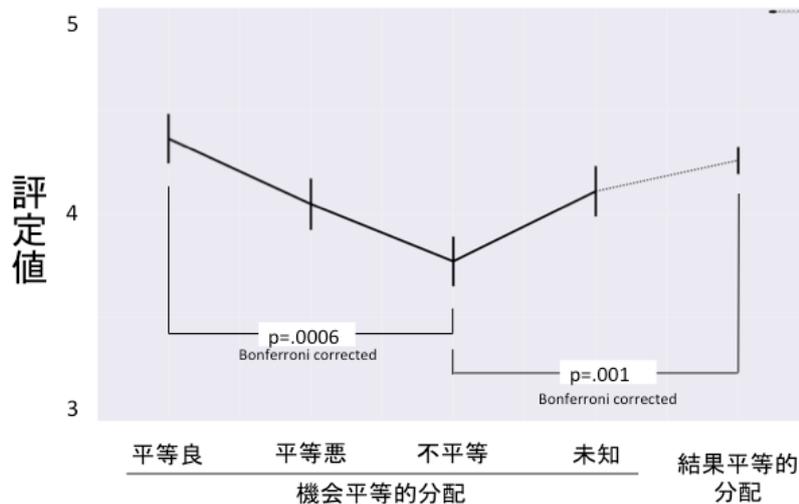


図1 各ケースにおける評定値

3.2. 結果平等タイプと機会平等タイプの分類

次に、イデオロギーの個人差と Outcome bias との関係を検証するため、参加者を結果平等タイプと機会平等タイプに分類する。表2に、個人差検出シナリオ（2.2. シナリオ参照）で、参加者が分け方①（結果平等的分配）か、分け方②（機会平等的分配）のどちらを選ぶ/選んでほしいか、についての回答の頻度を示した²。表2から分かるように、参加者の回答は分け手・受け手の立場ともに基本的に連動している。また結果平等的分配が選ばれる頻度は、機会平等的分配が選ばれる頻度より多い（分け手の立場：64%, binomial $p<.000$, 受け手の立場：63%, binomial $p<.000$ ）ことが分かった。本研究では、分け手の

² 参加者が【絶対に①】もしくは【どちらかといえば①】を選んだ場合は分け方①（結果平等的分配）を選択し、【絶対に②】もしくは【どちらかといえば②】を選んだ場合は分け方②（機会平等的分配）を選択したと分類した。

立場及び、受け手の立場の双方において一貫して結果平等的分配を選択した参加者(128名)を結果平等タイプ、一貫して機会平等的分配を選んだ参加者(62名)を機会平等タイプと分類し、Outcome bias の影響を検証する。

表2 個人差検出シナリオの回答頻度

		どちらの分け方を選んでほしいか (受け手の立場)		
		結果平等	機会平等	計
どちらの分け方を選ぶか (分け手の立場)	結果平等	128	29	157
	機会平等	32	62	94
計		160	91	251

3.3. タイプ別の傾向

図2に、シナリオの各ケースについての参加者の評価をタイプ別で示した。図1と同様、横軸は左からルール②（機会平等的分配）が選ばれたケースの各 Outcome 条件が4つ示されており、最も右では、ルール①（結果平等的分配）が選ばれたケースが示されている³。点線が機会平等タイプの回答、実線が結果平等タイプの回答を示す。Outcome bias の影響がタイプによって異なるか検証するため、機会平等的分配が選ばれたケースの各参加者の評価を従属変数に、Outcome 条件と参加者のタイプを表すダミー変数を独立変数とした分散分析を行ったところ、Outcome 条件の主効果 ($F(3, 182)=2.97, p=.03$)、タイプの主効果 ($F(1, 182)=15.59, p=.0001$)が観察され、Outcome 条件×タイプの交互作用効果の傾向 ($F(3, 182)=2.12, p=.09$)が見られた。両タイプが具体的にどの Outcome 条件で評価が異なっていたかを多重比較で検定したところ不平等条件でのみ有意な差 ($t(34.05)=-5.88, p<.000, Bonferroni corrected$)が見られた。

³両タイプの間には、結果平等的分配に対する評価での有意な差($F(1, 188)=22.90, p<.000$)及び、機会平等的分配に対する評価でのタイプの主効果 (本文参照)が見られる。このことから、個人差検出シナリオの回答を用いた参加者のタイプ分けは妥当であると考え、のちの分析を行う。

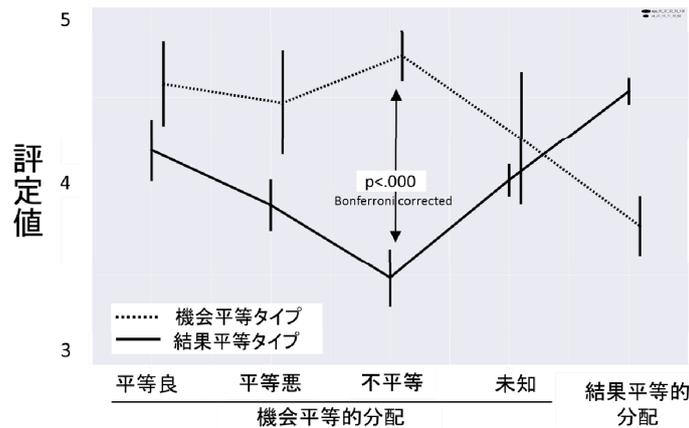


図2 タイプ別の各ケースにおける評定値

4. 考察

これらの結果から、人々の間に所得の格差が明らかとなった場合、機会平等政策は特に低く評価されることが示唆された。また、このことは、結果平等派が全体の 2/3 ほどを占める多数派だった (3.2. 結果平等タイプと機会平等タイプの分類参照) 原因は、人々の不平等回避傾向 (Fehr & Schmidt, 1999) に起因した可能性が示唆された。

今回のシナリオ実験で設けた機会平等的分配とは、確率的に 20 万円しか得ることができない不遇な他者が生じうる政策であった。このような政策が行われている社会とは、確率的に誰もが不遇な立場になりうる社会である (Rawls, 1971)。このことは、そもそも人々にとって、所得政策に代表される「社会的な分配」が何を意味するか考えると重要な意味を持つ。例えば、人間の進化的適応環境であった狩猟採集社会では、狩りの獲物を平等に近い形で分配することが知られている。これは集団での分配が、狩猟という成功についてリスクが存在する行為のリスクヘッジの機能を持つからだ指摘されている (Kameda et al., 2005)。また、こういった分配とリスクヘッジの関係は現代の保険制度などにも広くみられる。こうした背景を一因として、人間は、社会の不平等 (リスクの存在を強く喚起させる) に無関心ではいられない心的特性を獲得したと言えるかもしれない (Fehr & Schmidt, 1999; Kameda et al., in press)。そうだとすると本研究で、結果的にばらつき (リスク) が生じうる機会平等的分配が全体として支持されなかったのは、人々が「社会的な分配」にリスクヘッジの機能を期待する心的特性を持っていたためと言えるだろう。現実の所得政策の問題においても、Outcome bias が不平等な結果が実現した際にマイナスの効果として顕著に表れると考えるなら、社会的分配のリスクヘッジとしての機能を所得政策の必須条件として盛り込むことが、より大きな総所得を追求する所得政策を社会的に実行するための基礎として重要だと考えられる。

引用文献

- Baron, J. and Hershey, J., 1988. Outcome bias in evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology* 54(4), 569-579.
- Fehr, E. and Schmidt, M., 1999. A theory of fairness, competition, and cooperation. *The Quarterly Journal of Economics* 114(3), 817-868.
- Kameda, T., Takezawa, M. and Hastie, R., 2005. Where do social norms come from? The example of communal sharing. *Current Directions in Psychological Science* 14,331-334.
- Kameda, T., Inukai, K., Higuchi, S., Ogawa, A., Kim, H., Matsuda, T. and Sakagami, M., in press. The Rawlsian maximin rule operates as a common cognitive anchor in distributive justice and risky decisions. *Proceedings of the National Academy of Sciences*.
- Rawls, J., 1971. *A Theory of Justice*. Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, MA.